

「東京新聞」の「平和の俳句」に9月に掲載された句から紹介し、私の感想を書き加えたい。今月から、エッセイストでタレントの阿川佐和子氏が選者に加わっている。

「かくありぬ幸（さき）沖縄に孫を得て 平瀬清弘（77歳）」<阿川佐和子 いまだ平穩訪れぬ沖縄への思いも込めた孫への応援歌と受け止める。> <いとうせいこう なるほど、ひとつの人生の道が沖縄をより強く思う気持ちを作る。> 平瀬氏のお孫さんが幸せに成長してほしいと願う。神学生時代、パスポートを持って留学して来た数人の沖縄の友人がおり、彼らは沖縄で牧師になり、活躍された。私の義妹は、現在沖縄の教会で牧師をしている。沖縄に行って8年くらいであるが、すっかり沖縄県民になりきっている。同人誌『時の徴』に「ちゅら札子通信」を連載し、沖縄県民の怒りと屈しない心を伝えている。昨年、訪ねた「高江」で、毎日、基地建設に反対している住民を機動隊が暴力的に排除している状況を悲しく思う。

「一段とりっぱなお墓皆戦死 蓮池外枝（そとえ）（80歳）」<いとうせいこう 送りたい気持ちがそうさせたのだろう。残された者たちの悔恨も。> <阿川佐和子 「戦死」が栄誉だった時代の名残をお墓に見て複雑な心境でしょう。> 私の故郷の墓地でも、ひときわ立派なお墓は戦死者のお墓であった。戦死者の栄誉を称えたのである。お墓は立派でも、遺族の悲しみは癒されることはないだろう。国会で、安倍首相の「海上保安庁、警察、自衛隊の任務に敬意を表そう」という演説に、自民党議員はスタンディングオベーションで応じた。北朝鮮でよく見られる光景であるが、私は自衛隊の死者が出た時の予行ではないかと恐れを感じた。

「麻痺（まひ）の身に尖（とが）りし25条とは 大久保巳司（みつし）（63歳）」<いとうせいこう 福祉を国に命ずる憲法二五条。自らの麻痺の体にそれは直接つながっていると作者は詠む。「尖りし」という言葉で私たちにも伝わる。> 戦時中、障害者たちは「国賊、穀潰し」と、兵士になれないことをなじられた。憲法25条は「生存権、国の生存権保障義務」すべての国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。②国は、すべての生活面において、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」と謳っている。この条文がしっかり尖って、行きわたるところに平和がある。

「この吾（われ）を平和であれと母が産む 池野武行（71歳）」<いとうせいこう 平和でなく生まれよと思う母はほとんどいない。ならば平和に。> <金子兜太>その平和を踏みじめる者を憎む。母にとって自分は平和の使徒なのだ。> 戦時中は、兵士を作るために子どもを産むことを強要され、男児を沢山産んだ母親は称賛された。池野氏の句のように、母親は子どもの幸せ、健やかな成長を願って産むのである。戦争で殺し合うことを期待して、子どもを産む母親は一人もいない。戦争に向かう動きの一切に反対を言い表していきたい。

「あの夏に核をすてるとヒロシマへ 久嶋（ひさじま）礼智（のりさと）（16歳）」<金子兜太 「あの夏」の広島で、核投下したエノラ・ゲイの搭乗員たちに「落とすな！ 捨てろ！」と叫んでいる。作者は高校二年生> 高校二年生の久嶋君は、核兵器を捨てろと言うために広島に行った。オバマ大統領は広島平和記念公園で、「71年前、明るく、雲一つない晴れ渡った朝、死が空から降り、世界が変わってしまいました。閃光と炎の壁が都市を破壊し、人類が自らを破滅させる手段を手にしたことを示したのです」とスピーチした。死は自然に舞い降りたのか。死をもたらし、世界を変えた主体を示さない文章は責任の所在を明確にしない、死んだ言葉である。久嶋君は、自分の言葉で「捨てろ」と叫んでいる。若い彼らの真っ直ぐな反戦・平和の声を聞くと、希望が湧いてくる。